

小学校長会会長賞

堺市立 浜寺東小学校 六年

和田 拓真

安心して生活できる社会をめざして

「僕らは一人じやない」

社会を明るくするためには、一体何が必要なのか。みんなが安心して生活できる社会をつくるには、どうすればよいのだろう。

みんな考え方も生活環境もまるで違う人どうしが信頼しあい、相手を思いやり認め合い協力すること、支え合うことだと思うけれどとてもむずかしい事にしか思えなかつた。しかし、学校での出来事で僕は気づきはじめた。

僕は、休み時間にそうじをしている。始まりは小学五年生の時の休み時間だった。その日は、どんよりとしていて、朝から雨が降り続いていた。ふと目に入った廊下が、とてもうす暗く見えた。

僕は友達に、

「一緒にそうじをしよう。」

と声をかけた。すると友達は、快く受け入れてくれた。廊下がだんだんきれいになると、なんだか心が軽くなつたような気がした。

「そうじをしたら、心もきれいになるんだ。」と気づいた僕は、その日から廊下のそうじを続けるようになつた。時には教室。教科書やノート、国語辞典も乱雑に置かれているより、並べて整える

だけでもすっきりした気持ちになつた。ある日、普段はあまり話さないクラスメイトから、

「いつもそうじをしてくれてありがとう。」

と言われた。そして、たつた三人で始まつたそうじは、他の友達にも広がつた。いつしかそうじの範囲も廊下から階段、玄関へと拡大していった。僕の想像を超えて広まつていつたのはなぜだろう。もしかしたらそうじは、みんなの心までも明るく、晴れやかにしているのかもしれない。

始めの頃は、まだそうじが終わらずに休み時間までそうじを続けていると誤解していた先生も応援し、手伝ってくれる先生までいた。

小学六年生になった今も、日課のように休み時間のそうじを続けている。児童集会で、校長先生に紹介されることもあつた。僕は、すごい事をしているとは思っていない。ただ、一緒にそうじをしてくれる友達や、共感してくれる友達がいることがうれしいし、楽しいから続けられているんだ。

最近、そうじをする場所のアンケートをとつたりして、普段話をしない子にも参加してもらえるように工夫した。するとたくさんの声が届いた。驚いた。こんなに大勢の人が共感してくれるということに。

そうじを通して、コミュニケーションが生まれ、いろんなことを話すようになったクラスメイト、友達から友達へとつながり協力してそうじができたこと、その一つ一つの出来事が僕にとってとても大切なものになっていた。

「信頼し合い、相手を思いやり認め合い協力すること、支え合うこと」は、僕にはとてもむずかしくてできそうにないと思つていたことだけれども、一生けん命がんばっている姿がみんなに伝わっていた。

社会を明るくする目標に向かつて一歩前に進み出すことや、困つて立ち止まつた時には、話を聞いてくれる仲間がいることの素晴らしさを、僕は身をもつて感じることができた。

そして、思った。僕らは一人じやない。

